

— 書 評 —

鳥たちに明日はあるか*

著 ロバート・A・アスキンス
 訳 黒沢令子

2003年 文一総合出版 2,400円+税

本書は“Restoring North America's Birds”（北米の鳥の復活）の訳本である。1章から9章は、草地から老齢針葉樹林まで、北米で危機に瀕しているさまざまな生態系とそれに依拠する鳥についての総説であり、どの章も独立して読める。10章では、さらに具体例を挙げながら、全体を貫いている著者の視点を簡潔にまとめている。最後の11章は、日本語版で追加されたもので、著者が実際に日本で経験したり調査したことをもとにして日本の鳥の保護について論じている。

最近の保全生態学関係の本では必ず取り上げられる、個体群存続可能性分析やメタ個体群構造、遺伝的多様性といった話題は、本書にはほとんど出てこない。代わって著者が提示しているのは、生態系の成り立ちを長期的（＝進化的、歴史的）かつ広域的に解明し、それを保全ないしは再現することによって、生態系やそれに依拠する生物を保全しようという景観生態学のアプローチである。このアプローチの鍵は、攪乱の理解にある。各地域に固有の森林や草原、湿地といった生態系は、もともと野火や嵐、洪水といった自然の攪乱で作られ、維持されてきたことが繰り返し紹介されている。ビーバーによるダム作りやプレイリードッグによる穴掘り、バイソンやシカ類による採食、食植性昆虫の大発生といった生物による攪乱に依存している生物もいる。さまざまな生物が攪乱やそれによって出現ないしは維持される生態系に依存するように進化してきた。このことを理解しないと適切な保全策を立案できないというのが、本書のもっとも重要な指摘の一つである。

本書のもう一つの重要な指摘は、従来の保護区中心の保全策だけでなく、多数の保護区のネットワークや、農業や林業といった経済活動と両立す

る保全策が必要だとしている点である。例えば、日本でも見られるイスカは、針葉樹の実をうまく食べられるように特殊化している。雛にも針葉樹の実を与えるほど針葉樹林に依存している。針葉樹の結実量は地域や年によって大きく変動するため、イスカは毎年実の豊かな地域を求めて大陸内を放浪する性質を進化させてきた。少数の良質な保護区を設けてもこうした鳥を保全することはできないので、多数の土地所有者や行政機関、NGOなどの幅広い協力によって大陸スケールでイスカの生存を保証するような方策が必要なのである。

北米は日本と比べるとはるかに広大で、自然と人の歴史的な背景も違うので、同じようなアプローチは日本には適さないと思うかもしれない。しかし、著者が日本語版でわざわざ強調するように、攪乱によって生じるさまざまな遷移段階に固有の生物は日本にも少なくない。また、本文ではほとんど触れられていないが、著者の視点は、ヨーロッパにおける農地の鳥の保全についての議論とも共通している。したがって、本書は、これからの日本における鳥類保護や生態研究に多くのヒントを与えてくれるだろう。

著者の驚異的な情報収集力と文章力により、本書は鳥の興味深い生態についての紹介としても楽しめる。例えば、ダイオウマツの疎林に特殊化しているホオジロシマアカゲラは、巣穴を掘るのに平均で6年以上を要し、いったん完成した巣穴は20年も利用する。この貴重な巣穴は協同繁殖するグループによって守られ、継承される。何年か前に伊藤基金による国際鳥学セミナーで招待したジェフリー・ウォルターズ博士たちの研究成果であるが、ダイオウマツ林の成り立つ仕組みとともに改めて知ると、自然の妙に感心する。また、有名なリョコウバトの絶滅は、単純に乱獲によるものではなく、堅果（ドングリやブナの実）の豊かな地域を求めて大群で大移動するという、元来は適応的であった性質が災いしたという話や、海鳥にもかわらず老齢木の樹冠部に営巣するマダラウミスズメ（カバーのイラストにもなっている）の話なども、私にとっては新鮮だった。

本書には、日本語版で追加された11章を除いて、250種近くもの鳥が登場し、その9割は日本では見られない種である。この他に100種近くの植物名も出てくる。これだけの種数についてなじみのない和名が出てくると、正直言ってしんどい（訳者の苦労は想像に難くない）。さいわい、和名から学名が引ける索引が付いているので、北米の鳥の図

*本書評は2003年6月に投稿されましたが、編集幹事の手違いにより、掲載ができませんでした。おわび申し上げます。

鑑があればどんな鳥かを参照できる。ただ、多少とも英語論文を読む機会のある人にとっては、索引か本文の初出時に英名もあればより読みやすかったかもしれない。アメリカの大きな地域名と州名程度がわかる地図が巻末か巻頭にあればさらに親切だった。

原著者のもとで修士課程を修められた黒沢氏による翻訳は、非常にこなれていて、訳本とは思えない読みやすい文になっている。唯一、細かいところだが、p. 327の「満州」は「中国東北部」とすべきだろう。580編もの引用文献が省略されることなく掲載され、日本の鳥についての章が追加されているにもかかわらず、原著のハードバック版（40ドル）よりもずっと安いので、本書は間違いなくお買い得である。たくさんの学問的ヒントと情報に満ち、北米の生態系と鳥の興味深い話題を分かりやすい日本語で読める本書は、バードウォッチャーから鳥類学者、保全生態学者まで、幅広い読者にお薦めできる。なお、残念ながら、省略されている図がいくつかあるので、論文等で引用する場合には、原著も参照された方がよいかもしれない。

藤岡正博

(中央農業総合研究センター・鳥獣害研究室)